

『山園小梅』 林 逋

梅を妻のように愛した詩人

杭州の西湖に浮かぶ島、孤山は梅の花の名所。北宋の詩人林逋は、若い時に江淮地方（江蘇省と安徽省一带）を流浪したが、人生半ばを過ぎて西湖の孤山に庵をかまえ隠居すること二十年。ここで梅三百株を植え、鶴を飼い、終身結婚せず、「梅妻鶴子」、梅を妻とし鶴を子として過ごし、一生を通じて名利に淡白な人であった。

そのお墓は今も梅の花に包まれたこの地に遺されている。

山園小梅 林 逋

衆芳搖落獨暄妍 衆芳搖落して獨り暄妍

占盡風情向小園 風情を占め盡くして小園に向こう

疎影橫斜水清淺 疎影橫斜水清淺

暗香浮動月黃昏 暗香浮動月黃昏

霜禽欲下先偷眼 霜禽下らんと欲して先ず眼を偷み

粉蝶如知合斷魂 粉蝶如し知らば合に魂を斷つべし

幸有微吟可相狎 幸いに微吟の相狎るべき有り

不須檀板共金尊 須いず檀板と金尊を共にするを

意 解

ほかの多くのかぐわしい花がゆれ落ちて枯れ枝となっている時に、あたたかく美しい梅の花だけがこの小園で風流なよいおもむきを独占している。

疎らな枝は清い流れの水に斜めに影を映し、ほのかな香りが月の昇るたそがれ時にどこからともなく漂ってくる。霜がれどきの鳥は、梅の枝に下ろうとして、定めかねてあたりをぬすみ目で見まわし、白い蝶も今、もし美しい梅の花のあることを知ったならばおそらくびっくりすることであろう。

幸いにひそかに詩を吟ずる私の声がこの花とよくうちとけ合うから、何も拍子をとる木をならして調子をとったり、黄金の酒樽を用意する必要はないのである。

西湖・孤山の風景

杭州市は西湖中心の街で、西湖は市の西郊外にあり、湖水面積は五・七平方キロメートル、周囲は十五キロメートルにおよぶ湖。

湖畔は国賓館や、上海の富豪の別荘地として数多くの建物がある著名な景勝地である。

また、孤山は西湖西北にある高さ三十八メートルの、湖最大の島の名。ただ完全に孤立した島でなく、東北へは一キロメートルの長い白堤（白居易が工事した湖堤）、西

へは西冷橋によって陸地と結ばれている。緑の松が茂り、季節により梅の花やつつじの花に彩られ西湖名勝の一つとなっている。

西 湖 十 景

▽蘇堤春曉

蘇軾が西湖の浚渫を行つたときの泥土で築いた堤、湖を南北につなぎ、全長二・八キロメートルに及んでいる。蘇堤の美しさは、春の朝もやに柳が



蘇堤春曉

▽三潭印月

けむり、鶯がさええずるときもつとも際立つ。明代の浚渫の際、湖中に小島が造られた。その南の湖面に三つの石灯籠が建てられ、石灯籠の灯火と月光が湖面に映る風景。

▽柳浪聞鶯

西湖東南の岸边にある景勝地。四つの庭園で

▽花港観魚

鶯の鳴き声を楽しむ。

蘇堤南端の金魚の池、牡丹園、船着場などが織りなす風景。

▽断桥残雪

冬、白堤の雪が解ける様は石橋がとぎれとぎれに雪中に浮かぶように見える。西湖の美しさは冬景色に極まる。

▽平湖秋月

白堤の西端。西湖の月はここから眺めるのが絶景。

▽曲院風荷

西湖北西の蓮池と石橋が作りだす夏景色。

▽双峰挿雲

西岸からの南高峰、北高峰の眺め。ふたつの峰が雲におおわれて水墨画のような風景。

▽南屏晚鐘

南岸の南屏山中にある古刹浄慈寺。

▽雷峰夕照

南屏山の向かいの山にそびえていた雷峰塔の夕映えの風景。



断桥残雪



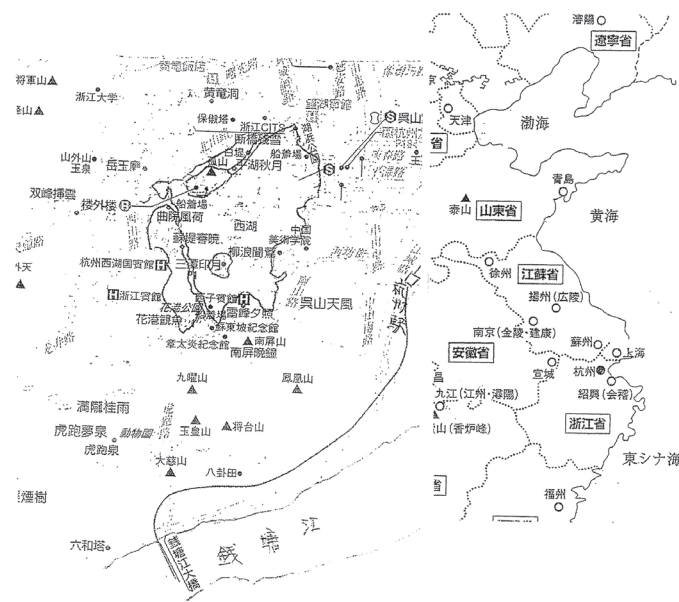
三潭印月

鑑賞

詩題の「山園小梅」は作者が隠棲していた孤山のふもと自分の庭園を山園といい、愛すべき梅という意味で小梅と題している。

最初の一句、二句は導入部分で、自分の家に咲いた梅の紹介です。「多くのかぐわしい花がひらひらと散り」秋から冬になって寒くなります。やがて見るものもない寒中に、「独り梅だけが暖気を帯びて美しく、風雅な趣を一身に担って、私の小園に咲き匂っている。」「向こう」は一般には方向性を示すがここでは、於・在と同じ意味で「そこにある」という場所を示している。

三句、四句は梅の描



写で、香りに注目されているが全体としては絵のような情景です。「疎影」は梅の枝の形容です。

「まばらな枝は横に或いはななめに、清く浅い流れに影をなげており、どこからともなくよい花の香りが漂ってくる、月の光はたそがれ時の朧月夜である。」この薄暗い情景の描写は清く、淡く、甘美的な思いにかりたえます。

五句、六句は小さい動物たちの梅の花にたいする反応ぶりを表わし、鳥と蝶を擬人化している。「霜の降りる季節の鳥は、地上に下りようとして、その前に眼を偷む。」「眼を偷む」は、おずおずとした、気後れた視線の時に使います。鳥が下りる前に梅の花の上品で格の高い美しさに気後れしてしまうことを言いたいのであろうか。

花を生きがいとしている蝶が、同じ季節に生まれ合わせることができないことを嘆く。蝶は季節がずれていますから、梅の花とは一緒に生きられない。「自分が生まれる前にこんなに美しい花が咲くと知ったなら、きっと魂も消えるほど悲しむだろう。」つまり梅の花は他の花とも動物たちとも縁がうすい、美しく、気品と孤高の姿を兼ね備えている。

七句、八句は作者の梅の花に対する共感を強調して結びます。「幸い、この梅の花と調和するにふさわしい、私の静かな歌声がここにある。」だから「花見となれば楽器を

打ち鳴らし、調子をとったり、黄金の酒樽の前で、大騒ぎして眺めるのが多いが、美しく気品の高い梅にはふさわしくない。」

この詩は詩中で「梅」という字は一字も使われていない、しかし梅を詠じた詩が多いその中でもこの詩は最高の作と言われているそうです。梅の花の独特な姿と香り、そして気品を見事にとらえ、それを的確に表現しています。詩中の「疎影」と「暗香」が梅の花の代名詞として定着したのも林逋のこの詩以降である。

風光明媚な西湖のほとりで世俗を離れ、気高く生きた詩人は「其の詩澄淡高逸にして、其の人為るが如し」と評された。そして梅を妻というほどこよなく愛したからこそ、名作が誕生したのでしょうか。

西湖の美しさを詠ず二人の詩人

白居易は長慶二年（八二二）杭州刺史（知事）として、三年間この地ですごした（五十二、三歳）。その時期に西湖の美しさを詠じた一詩に「春題湖上」がある。その前半にこう歌われている。

湖上春来似画図 湖上春来画図に似たり

乱峰圍繞水平鋪 乱峰圍繞して水平らかに鋪く

松排山面千重翠 松は山面に排す千重の翠

月点波心一顆珠 月は波心に点ず一顆の珠

▽春の訪れた西湖の景色は、一幅の美しい絵のよう。高く低くつらなる峰々が周囲をとりかこみ、湖水が平らかに広がっている。

山肌にならぶ緑の松は、幾重にも翡翠の羽をかさねたかのようなだ。湖水のまん中にうつる明月は、まるでひとつぶの真珠。

一方、北宋の蘇軾が杭州通判（副知事）在任中の熙寧六年（一〇七三）、三十八歳のときに作った即興詩「飲湖上初晴後雨」によって西湖は天下第一級の詩跡となる。

水光滌灑晴方好 水光滌灑として晴れて方に好く

山色空濛雨亦奇 山色空濛として雨も亦た奇なり

欲把西湖比西子 西湖を把つて西子に比せんと欲すれば

淡粧濃抹總相宜 淡粧濃抹総べて相ひ宜し

▽ひろびろとさざ波にゆれる湖面は、陽光をあびてきらめき、西湖の景色は晴れてこそすばらしい。そぼ降る雨の中、湖畔の山々がおぼろにかすんでいる雨の西湖も、またひとときわ風情がある。

西湖の美しさを当地（越）ゆかりの美女西施になぞらえてみれば、淡い薄化粧もあでやかな厚化粧もどちらも全てよく似合う。

湖水と女性という異質の美を対比させた奇抜な着想をもちいて、西湖の魅力を知らしめた名作である。

そして蘇軾は十六年後の元祐四年（一〇八九）、五十四歳の時、自ら希望して今度は知杭州（知事）となつて来任し、西湖の大改修工事をした。湖底を浚渫した泥土を用いて築いたのが、湖の北岸と南岸を結ぶ約二・八キロメートルの散策路―蘇堤である。

南宋以後の西湖は、いっそう文人墨客の清遊の地として有名になり、大量の詩詞に彩られる美しい詩跡となる。